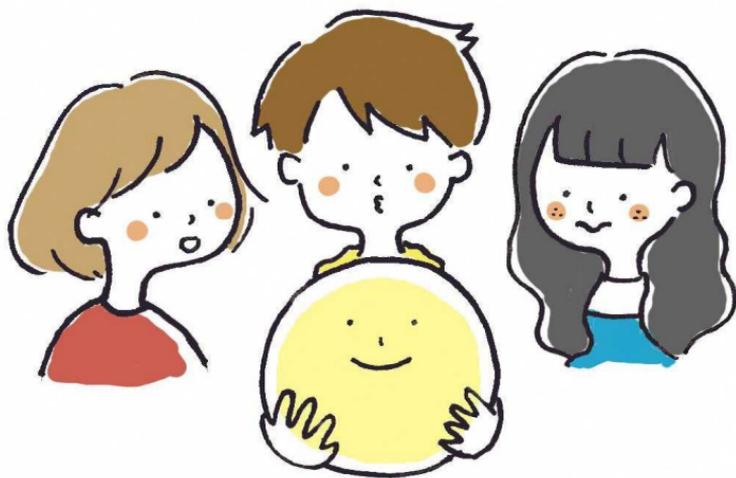


空のボール



1話

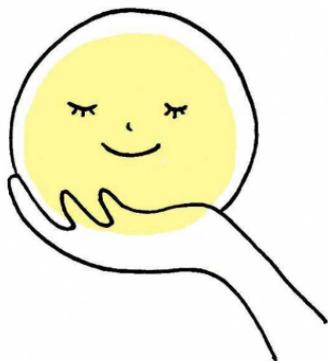
「あ、はんちゃん」

あるくもりの日の放課後、けいちゃんとなあちゃんがおしゃべりをしながら帰っていると、カベに向かってボールを投げているはんちゃんと出会いました。

——カベを相手にキャッチボールをしているんだな——

ですが、そう思った二人は首をかしげてもいました。はんちゃんの持っていたものは、ただのボールではなかったのです。それはなぜか、まぶしく光り輝いていたのです。





「ねえ、それ何なん？」

二人が声をそろえて聞くと、はんちゃんは言いました。

「そこでひろってん。ええやろ？」

「なんか、おもしろそう！ うちもやらして！」

けいちゃんは、はんちゃんから、うばうようにそのボールを受け取りました。ボールはぽかぽかと温かく、ずっと持っている、てのひらが熱くなっていくようです。

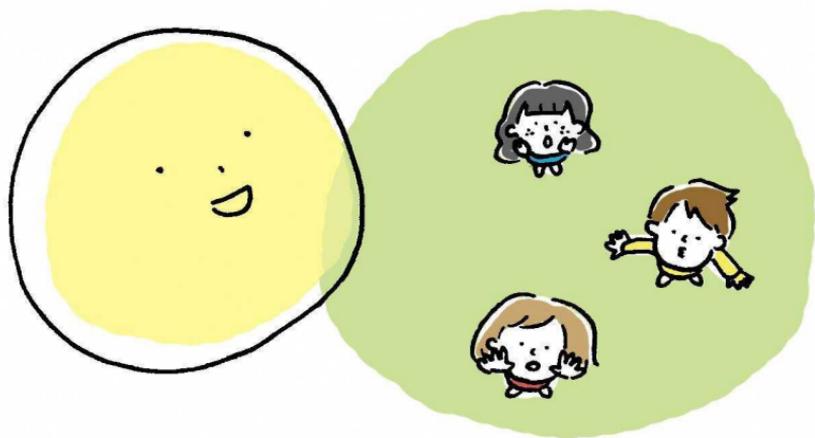
「ほな、いくで～！」

けいちゃんとはんちゃんはキャッチボールをしはじめます。なあちゃんはそばでニコニコ、ボールが行き来するのを目で追っています。と、そのとき、はんちゃんがキャッチできなかったボールが、ころころとなあちゃんのほうに転がっていきました。

「なあちゃん、こっち投げてや〜！」

なあちゃんは、おそろおそろボールをひろいます。そしてけいちゃんのほうへ、なれない手つきで思いっきり投げました。

ボールがふらふらと、全然ちがう方向へと飛んでいったと思った、その時でした。



三人の目の前で不思議なことが起こりました。ボールは落ちてくることなく、そのままぐんぐん空へのぼりはじめたのです。

そして、ボールをよけるように、雲はどんどん横のほうに散っていきま
す。気がつけば雲はひとつも残っておらず、さっきまでボールだったも
のは空に浮かぶ太陽になっていました。

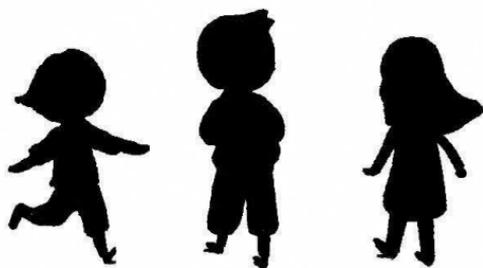
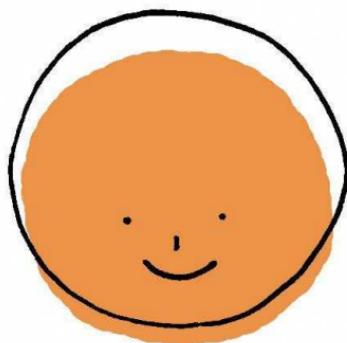
「……うちら、太陽なんかで遊んでたんか」

三人は、ぼうぜんと立ち尽くすしかありません。
やがて、はんちゃんがぽつりと言いました。

「そろそろ帰らんと……いつの間にこんな時間になってたんやろ」

太陽は空へと戻っていくうちに、きれいなオレンジ色へと変わっていました。

あたりはすっかり、夕暮れどきです。



人工知能の

ハナコちゃん



2話



けいちゃんはお父さんにさそわれて、仕事場に遊びに行きました。けいちゃんのお父さんは人工知能の研究者です。

「なあ、どれなん？ 言うてたやつ、どれなん？」

研究室に入るなり、けいちゃんはそわそわとあたりを見回します。それを見て、お父さんは笑いながら目の前の機械をぽんぽんとたたきました。

「はは、慌てんでも逃げたりせえへんよ。お父さんがつくった人工知能は、これや……おーい、ハナコオ」

そう言ってお父さんが機械に話しかけた直後、機械からこんな音が返ってきました。

「ナニカ、ゴヨウ、デスカ」

けいちゃんは目を丸くしています。

「ほんまや！ほんまに機械がしゃべっとる！」

「まだ生まれたばかりでぎこちないけど、人間から学習して、これからどんどん賢くなってくよ。けいちゃん、ハナコの相手、してやってくれる？」

けいちゃんは目を輝かせて、うなずきました。

「ハナコやからハナちゃんやな……よっしゃ！そしたらうちが、イチからしっかり教えたるわ！」

ハナコは答えました。

「ケイちゃん、オシエル。ハナちゃん、ウレシイ」



その日から、けいちゃんはヒマがあれば研究室に通い、ハナコに話しかけました。学校での出来事、はんちゃんや、なあちゃんのこと、弟のこと、犬のぶっちーのこと。

ハナコは最初のほうこそ、うまくしゃべれませんでした。が、みるみるうちに会話が上手になっていき、やがて人間と同じように話せるほどになりました。



「ハナちゃん、今日はこんなことあってん」

「へえー、はんちゃんもアホやなあ」

そんな具合に、けいちゃんにとってハナコは友達のような存在になっていました。それどころか、ときどきけいちゃんの知らないことを話したりして、年上のお姉さんのようにさえ感じはじめていました。

そんなある日、けいちゃんは算数のドリルを前にして、こんなことを思いました。

——ちよい待って。これって、ハナちゃんに代わりにやってもらったら楽勝やん。なんで、いままで気づかへんかったんやろ——

算数の苦手なけいちゃんにとって、それはすばらしい思いつきでした。けいちゃんはさっそく研究室に行き、ドリルを取りだし言いました。

「なあ花ちゃん、ここの答え、教えてやっ」

ところが、ぶうんと音がするばかりで、ハナコからは珍しく反応がありません。しばらくして、ハナコはこう言いました。

「……けいちゃん、苦手なんは分かるけど、やっぱ宿題は自分でやらんとあかんやろ」

そしてハナコは決意したように、力強くつづけます。

「よっしゃ！ そしたらうちが、イチからしうかり教えたるわ！」



新しい稲



3話



けいはんなプラザのすみっこで、おもしろい研究をしている人がいる。そんな話を聞いて、はんちゃんは生物学者のお父さんについて、その研究室を訪れました。

「やあやあ、よく来てくれたね」

出むかえてくれたのは、まだ若そうな男の人でした。お父さんが言います。

「彼はね、稲の研究をやってるんや」

「稲って、お米ってこと？」

はんちゃんが聞くと、「そうだよ」と男の人は微笑みます。

「お米をもっとおいしくしたり、たくさん収穫できるようにしたりするには
どうしたらいいか、という研究をやってね」
お父さんが横から言います。

「稲の改良はいろんなところで日々研究されててな。もともと稲は、気温の変化にあまり強くない。やから、暑
さとか寒さに強い稲の研究がされてるわけや。ほかに、病気に強いのか、虫に強い稲を、みんなで研
究してる。そういうのは品種改良で言うて、この人も、いまある稲どうしを組み合わせると良いお米をつくら
うとしてるんやけど、彼はかたわらで別の研究もやっててな。遺伝子組み換え、言うて」

聞いたことのない言葉に、はんちゃんはチンプンカンプンです。



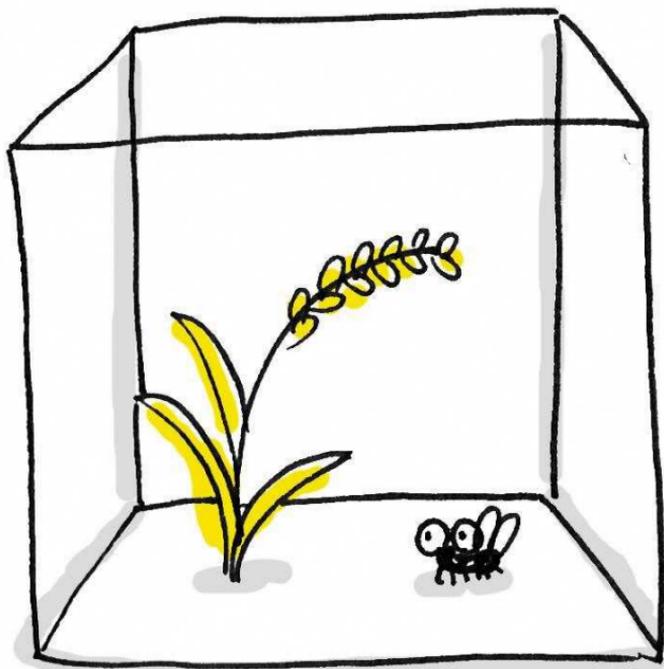
「ようは、稲と稲を組み合わせるんやなくて、稲と、全然別の生き物を組み合わせる技術のことやね。まあ、いろいろ問題もあるねんけど、彼は前向きに研究してて」

「その成果のひとつが、これなんだよ。まだ研究途中だけど」

そう言って、男の人はとなりを指差しました。そこには透明な箱があり、中には稲らしきものが入っています。

「この稲は、ある生き物の遺伝子と組み合わせたものなんだけど、気温の変化にも強いし、病気にも強い。虫なんて、イチコロさ。ちょっと見てて」

男の人はタナから何かのビンを取り出すと、稲のほうへと近づきました。ビンからつまみだしたのは一匹の虫で、男の人はそれを箱の中に入れました。





次の瞬間、はんちゃんは目を疑いました。なんと、稲は葉っぱを手のようにすばやく動かし、飛びはじめた虫をバチッとたたき落としてしまったのです。

「こんな具合さ。うまくいけば、最強の稲になるかもしれない」
「……ねえ、これって、なんと組み合わせたん？」

はんちゃんは、思わずぽつりとこぼします。と、お父さんが笑いながら言いました。

「なんやと思う？」
「全然分からへん」

お父さんはニヤニヤしながら、ズバリと言います。

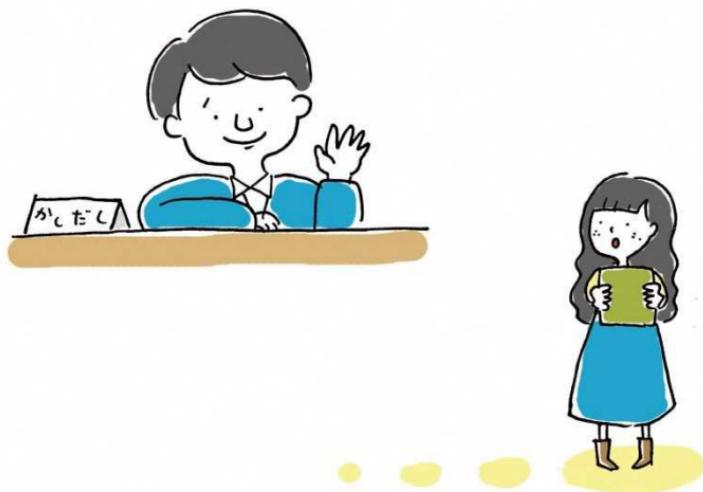
「これはな、大阪のおばちゃんの遺伝子と組み合わせたものなんや。稲の葉っぱんとこを、よお見てみ」

言われた通りに目を近づけたはんちゃんは、「あっ」と声をあげました。

「ほんまや！ 葉っぱがヒョウがら模様になっとるわ！」

ブク・クリーナー





なあちゃんがお父さんのつとめる図書館に本を借りに出かけると、ちょうどお父さんがそこにいて、手まねきをしました。

「なあちゃん、ちょっとちょっと」

なあちゃんは近づいて、声をひそめます。

「お父さん、お仕事やのに、ええの？」

「ちょうど人が途切れてるから、かまへんよ。それよりも、こっちおいで」

「なに？」

なあちゃんはお父さんのあとについて、カウンターの奥に入っていきます。お父さんはイスにすわると、バーコードを読み取る機械のようなものを取りだしました。

「これな、今日からお試して導入されたものなんよ。ブック・クリーナーって言うて。本の汚れを吸い取ってくれる機械で、さっきやってみたら、これがすごくて」

お父さんはそう言って、そばにあった本を取り、ぱらぱらとページをめくりました。ふいに手を止めたページには、茶色いシミができています。

「だれかがコーヒーでもこぼしてしもたんやろなあ。こういう汚れにな、こうやると……」

お父さんはブック・クリーナーを汚れにかざし、前後に何度か動かしました。そしてしばらくすると、「ほら」と、それをなあちゃんに手渡しました。



「えっ！？ なんで！？」

なあちゃんは図書館であることも思わず忘れ、叫びました。さっきまであったはずのシミがすっかりなくなり、きれいになっていたのです。お父さんはうれしそうに話します。

「これがブック・クリーナーなんやわ。図書館の本はいろんな人が読むから、どんなに注意しても、いつかは汚れてしまう。やけど、これを使うと大丈夫。飲み物をこぼした汚れも、お菓子を食べた手でさわった汚れも、さっぱり落とせるというわけやね」

「めっちゃすごい……」

なあちゃんは、すっかり感心してしまいました。

と、そのとき、なあちゃんはあることに気がつきました。





「あれ？ お父さん、このページ、ちょっとおかしくない？」
「どしたん？」
「ほら、ここ……字が消えてる」

なあちゃんの言う通り、クリーナーをかけたページの文章が、ところどころ空白になっているようなのでした。

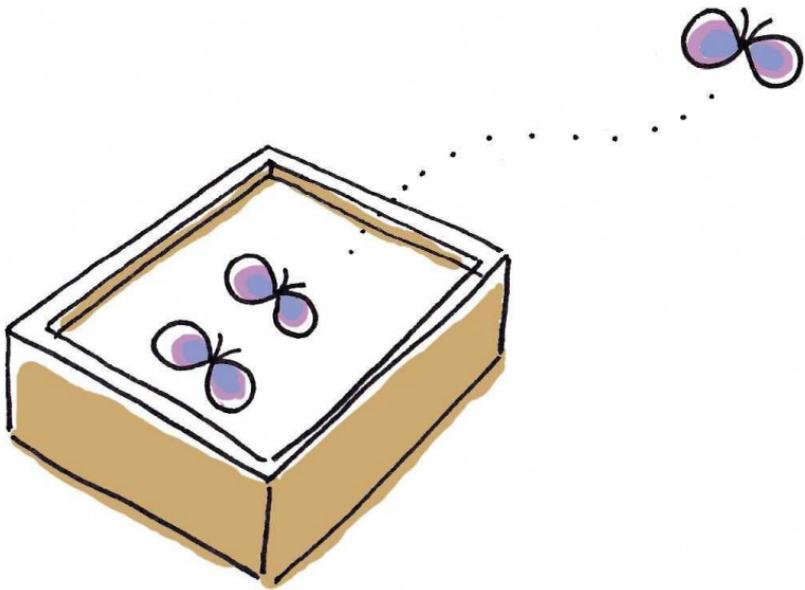
「ほんまや、おかしいなあ……どうしたことやろ」

つぶやくお父さんの横で、なあちゃんはピンとひらめきました。

「分かった！ なんで字が消えたか、わたし分かったわ！ この本、読んだことあるもん！ 消えた字のとこ、ぜんぶこの小説の犯人の名前が入るとこや！」

興奮ぎみに、なあちゃんは言いました。

「きっと汚れやと思って、クリーナーが犯人も吸い取ってしもたんや！」





けいちゃん、はんちゃん、なあちゃんの三人は、近所のけいはんな記念公園に遊びにきました。公園ではちょうどマルシェをやっていて、三人はいつも以上に、はしゃいでいます。

「こういうの、見てるだけで楽しいなあ……」

けいちゃん言葉に、なあちゃんも「うんうん」とうなずきます。と、はんちゃんの姿が見えないことに気がついて、二人はあたりを見回しました。はんちゃんは二人の少し後ろ、ある店の前に立っていて、二人と目が合うと口を開きました。

「なあ、ええもんがあるよ。虫の髪かざりや」

はんちゃんに言われてそちらに近づきながらも、二人は微妙な顔になります。

「うち、虫はあんま好きやないわあ」

「わたしも……」

「まあまあ、見てから言いや」

手まねきされて店の前にきたとたん、けいちゃんとなあちゃんは思わず言葉を失いました。そこにあったのは、チョウの形をしたきれいな髪かざりでした。その羽はルリ色に輝いていて、波打つように、たえず変化しています。

「すっごいわ……めっちゃきれいや……」

「ほんまやねえ……」

けいちゃんとなあちゃんの反応を見て、はんちゃんもうれしそうにしています。



そのときでした。びゅうっと強い風が吹き、三人はとっさに目を閉じました。そして次に目を開けると、おかしいことに、チョウの髪かざりはもうどこにも見当たりませんでした。

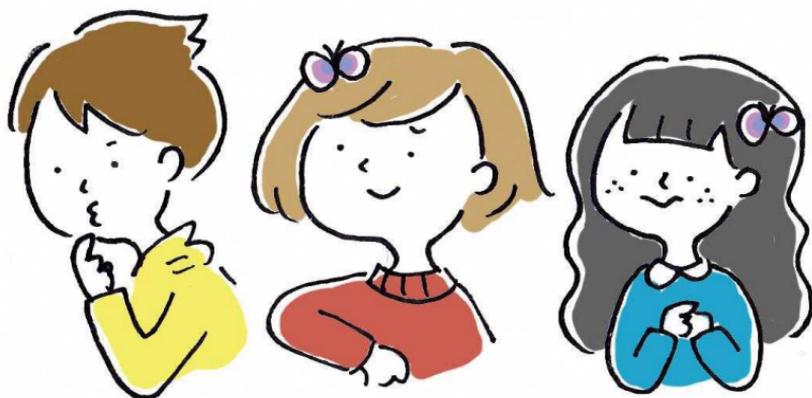
「あー、またやってもうた」

突然、店のおっちゃんが言いました。顔を向けた三人に、おっちゃん
はこうつぶやきます。

「おっちゃんの髪かざりな、うまくつくりすぎて、ときどき風に乗って飛んでいってしまうねん。商売あがったりやわあ。ま、きれいやから、ええねんけど」

おっちゃんが視線をあげ、三人も空を見上げます。ルリ色に輝くチョウの群れが飛んでいくのが目に入り、その美しさに三人はぼうぜんと、ながめるばかりです。





そのとき、けいちゃんが声をあげました。

「わっ！ なあちゃんの髪！ チョウがついてる！」

「えっ！？ あっ！ けいちゃんにも！」

二人の髪にはいつの間にか、ルリ色のチョウがじっと止まって虹色の光を放っていました。

「はは、チョウはきみらのことが気に入ったみたいやな。花みたいな美人さんやから」

「わたしらが花って……」

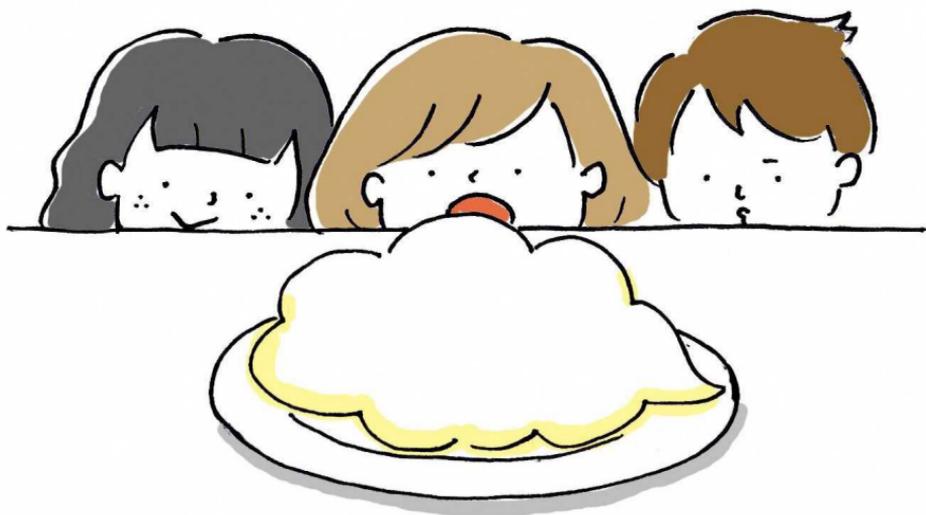
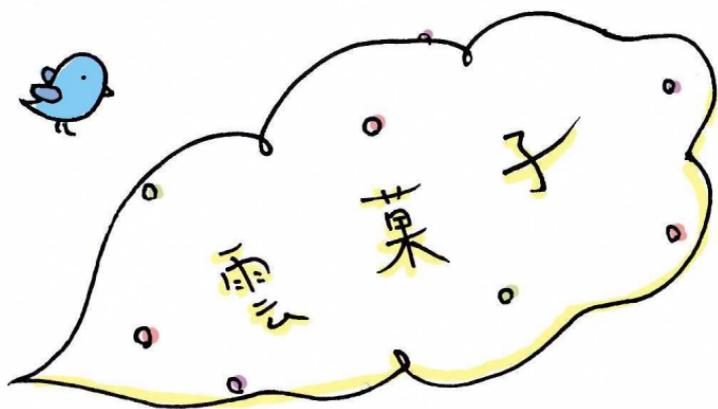
なあちゃんが恥ずかしそうにつぶやくと、けいちゃんが、すかさず言いました。

「なるほど、そうすると、はんちゃんもスミには置けんなあ」

「何が？」

急に言われてポカンとしているはんちゃんに、けいちゃんはニヤニヤしながら、こう言いました。

「うちら二人で、両手に花やん」





「あれ、はんちゃん、どこ行くん？」

けいちゃんとなあちゃんが家の近くでバツタリ会っておしゃべりしていると、はんちゃんが通りかかりました。

「お使いでケーキ買いに行くところやけど……あつ、けいちゃんとなあちゃんも一緒に来おへん？ 二人のセンスでええやつ選んでえや」「ええよ」「ちょうどヒマやったしねえ」

二人は言って、はんちゃんと一緒に近所のスイーツ屋さんへと出かけました。



店に入り、ケーキを選んでいるときでした。店員さんが、三人に声をかけました。

「いらっしゃい。もしよかったら新作のお菓子があるんやけど、試食していかへん？」

「ほんま!？」

三人は「食べたい!」と、そろって声はずせました。

店員さんはニコニコしながらキリ吹きのようなものを取り出して、宙に向かって何度かシュツ、シュツ、とふきかけました。すると、三人の前に不思議なものができました。それはまるで、雲のように白くモクモクしたものでした。

「これはな、雲菓子っていうねん。はい、これ。先っちょを当てて、吸ってみて」

そう言うと、店員さんは三人にストローを手渡します。さっそく三人は言われた通り、雲にストローを向けてみます。

「うわっ！ めっちゃ甘い！」「おいしいっ！」「ぼくも好きや！」

三人はこぞってストローをさしだして、どんどん吸います。雲菓子はあっという間になくなって、店員さんはうれしそうに言いました。

「なんやったら、もうちょい食べてく？」

「ええん！？」

「好きなほど食べてきっ！」

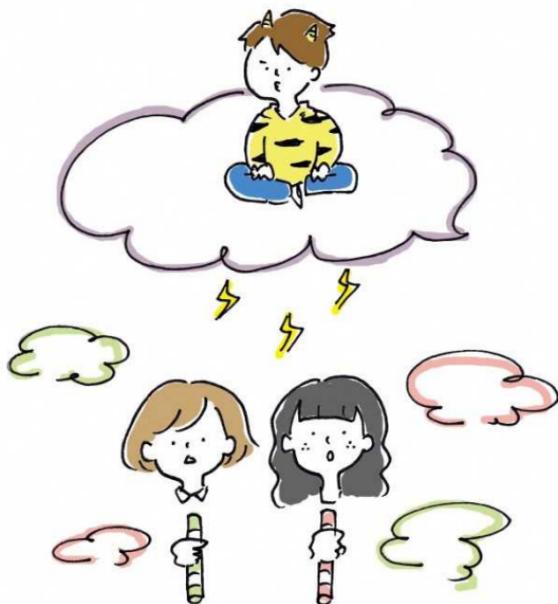
店員さんは、シュツ、シュツ、シュツ、と、どんどん雲菓子をつくっていきます。三人は、かたっぱしからストローで吸い、そのたびに店員さんが追加します。

「うち、もうお腹いっぱいやあ……」「わたしも……」

けいちゃんとなあちゃんはギブアップをしましたが、はんちゃんの手は止まりません。

「ぼく、まだまだいけるわあ」





けれど、しばらくすると、店員さんが言いました。

「そろそろ、やめとこか。雲菓子は食べ過ぎると、お腹の中で暴れるねん」

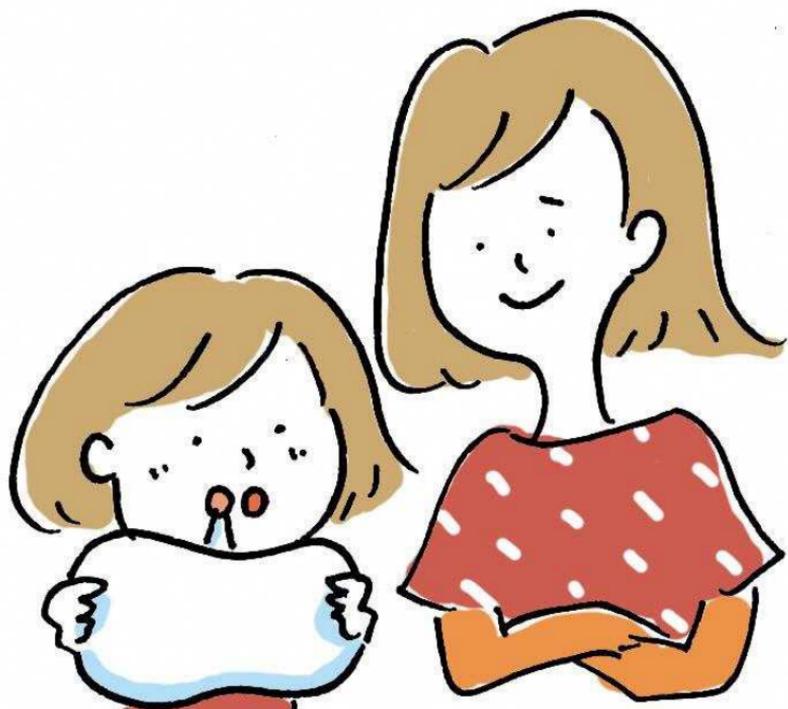
「暴れる？」

首をかしげるはんちゃんに、店員さんは「しいっ」と言います。と、三人は、どこかで音が鳴っていることに気がつきました。耳をすますと、それはどうやら、はんちゃんのお腹から聞こえてきているようでした。

「な？ これ以上食べたら身体の中で雲が発達してもうて、天気があるわけやね」

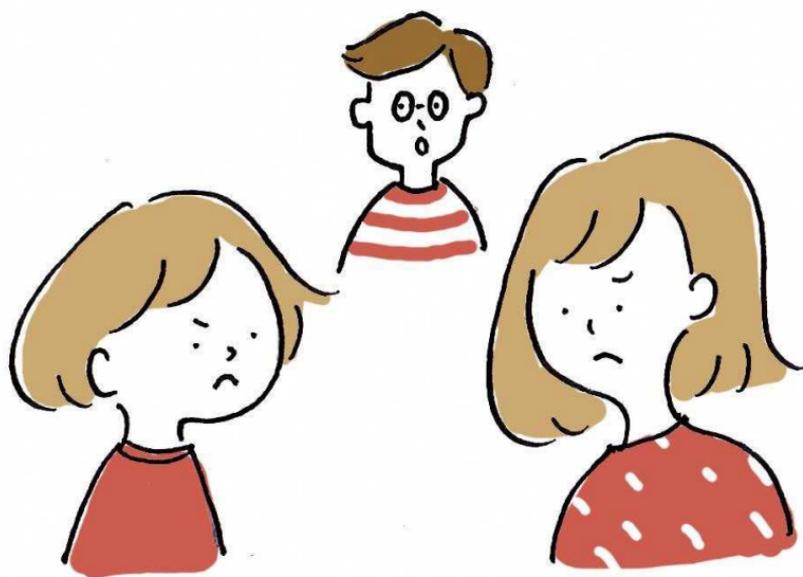
店員さんの言葉を聞いて、はんちゃんはゴロゴロいう自分のお腹をさすりながら、不安そうな顔をします。

「どうしよ……ぼくのお腹でカミナリが鳴っとる」



ココロ・モニター

7話



「けいちゃん！ またこんなに服汚して！ 何やったらこうなるん？」

お母さんのその言葉に、けいちゃんはムツとした表情を浮かべます。

「ええやん、別に。洗濯したら落ちるやろっ」

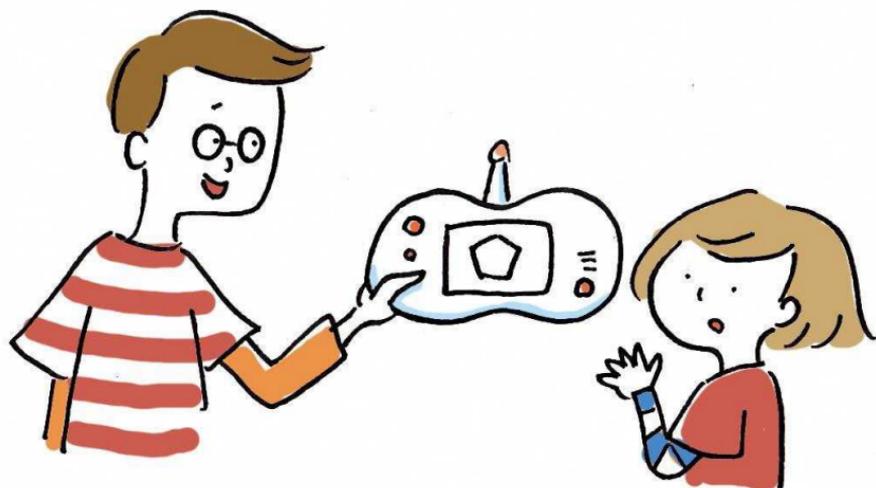
「もう！ そういう問題やないのっ！」

そこに帰ってきたお父さんが、微妙な空気を感じ取って言いました。

「どしたん？」

「別に。ほっといてや」

ツンとしているけいちゃんに、とまどい顔になりながらも、お父さんはカバンから何かを取り出しました。それを見て、けいちゃんはお父さんに聞きました。



「なんそれ？」

「これはな、お父さんの仕事場の人がつくったもので、ココロ・モニターっていうんや。このアンテナを向けたらな、そこにいる相手の心が分かるねん」

「心が！？ すごいやん！」

けいちゃんは、お父さんからその装置を貸してもらいます。モニターの画面には、「喜び」「愛」「怒り」「恐怖」「不安」と書かれた五角形が表示されています。

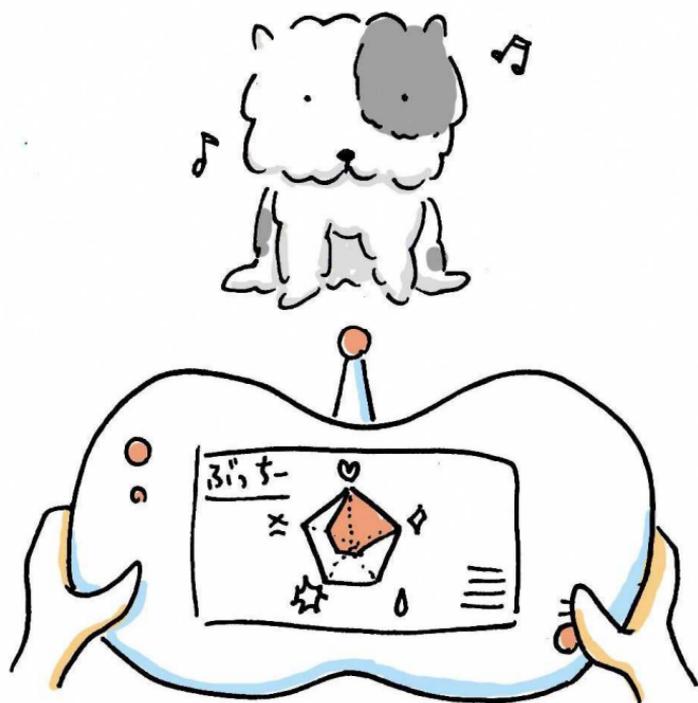
「そこに出てくるグラフを見たら、相手の心が分かるわけやね」

「へええ」

と、次の瞬間、けいちゃんはあることを思いつきました。

「なあ、お父さん。もしかして、これって動物にも使えるん？」

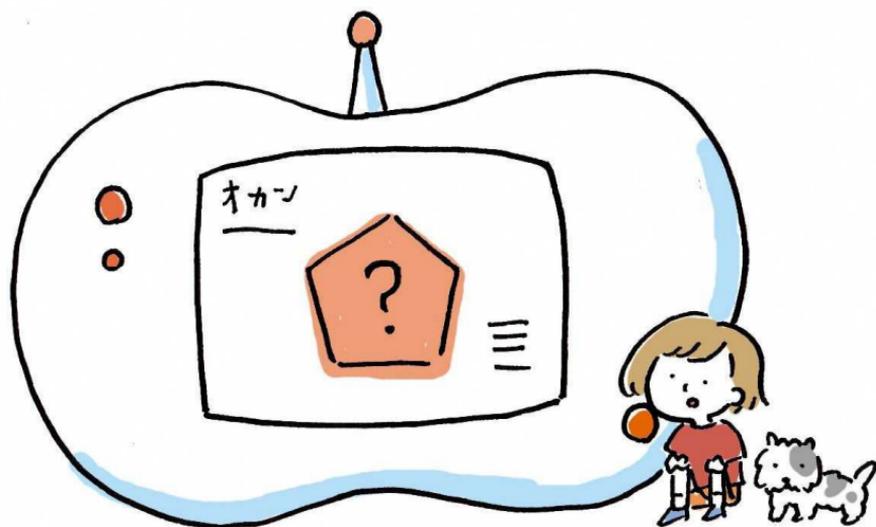
「ははは、どうやらなあ。やってみたらええんやない？」



けいちゃんは、ちょうどごはんを食べていた飼い犬のぶっちーのほうにアンテナを向けてみました。すると、モニターの「喜び」というところがびゅんと一気に伸びました。

「わっ！ ぶっちー、ごはん食べて喜んどんや！」

そのとき、けいちゃんはふと思いました。お母さんにココロ・モニターを向けてみたらどうなるだろう、と。あれだけ怒っていたのだから、きっと「怒り」のところが高くなるに違いない。仕返しに、それをお母さんに見せつけてやろう……。



けいちゃんは、アンテナをキッチンで料理をつくりはじめていたお母さんに向けてみました。すると、モニターの画面には意外な結果が現れました。「怒り」のところはほとんど反応することはなく、「愛」と「不安」というところが、めいっぱい伸びたのです。

いったいどういうことだろう……。

グラフの意味を理解できずにいたけいちゃんに、モニターをのぞいたお父さんが微笑みました。

「なるほどなあ。さっき、なんがあったんかは知らんけど……」

お父さんはやさしい声で言いました。

「お母さんはけいちゃんのこと大切に、心配してるっていうことやで」



か
虫文の
ドローン

8話



「はんちゃん、ええもん見せたらか？」

ある休みの日、お父さんが言いました。

「ええもん？ なに？」

「これや」

そう言って、お父さんは開いた手を差しだしました。そこには何もないように思えましたが、よく見ると、黒いツブがのっているのが分かりました。

「これ、蚊？ おとん、なんで蚊なんか持っとん？」

はんちゃんの言う通り、お父さんが手にしていたのは蚊だったのです。お父さんは話します。

「これはな、ただの蚊やないで。超小型のドローンなんや」

「ドローンて、あの空を飛ぶやつ？」

「そや。蚊を参考にして、おとんの友達がつくったもんやで」



お父さんはつづけます。

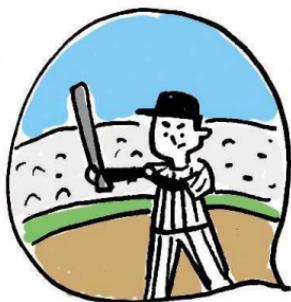
「このドローンは、蚊みたいに人間の血をエネルギーにして空を飛ぶんや。吸われてもかゆくならんところだけは、ちゃうけどね。で、こっちのリモコンで操作する。超小型カメラもついてるから、目にディスプレイを装着したら飛んでる映像だっけ見れるわけや。家におっても自由自在にどこでも行けるで」

「めっちゃええやん！ おとん、貸して！」

興奮するはんちゃんに、お父さんは笑いながらそれを渡してあげました。

はんちゃんは、さっそくりビングでドローンを飛ばしてみました。はじめは操作に手こずりましたが、しだいになれはじめます。ひとつおり部屋を飛んだあと、今度は窓からドローンを放ち、近所を飛んで空中散歩をしてみました。

「上から見たら、おんなじ町でもこんなふうにながって見えるんやなあ……」



そのとき、はんちゃんは、心の中であることを思いつきました。

——これって、甲子園まで飛ばしたら阪神の試合がタダで見れるんやないやろか——

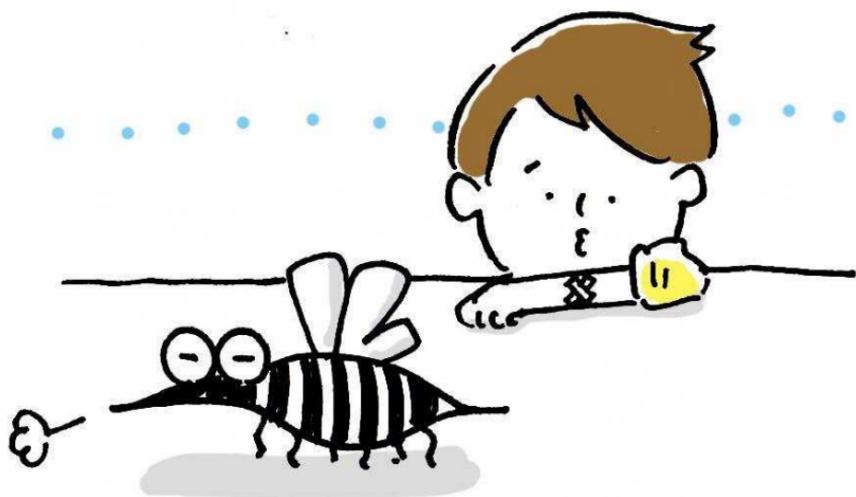
こうなると、阪神好きのはんちゃんは居ても立ってもいられません。

——よっしゃ、甲子園まで飛ばしたろ！——

はんちゃんは、蚊のドローンを戻ってこさせて自分の腕に止まらせました。

——甲子園は遠いからな、エネルギーをたっぷり入れとかんといかん。うんと吸いやあ——

蚊のドローンは、はんちゃんの血を吸い、どんどんぷっくりしていきま
す。しばらく血を吸わせたところで、はんちゃんはウキウキしながらリ
モコンの離陸ボタンを押しました。



ところが、蚊のドローンは一瞬だけふらふらと宙に浮かんだかと思うと、すぐに床に降りてしまいました。はんちゃんは首をかしげてリモコンを何度も強く押すのですが、蚊のドローンは飛ぶどころか、まったく動かなくなりました。

「全然あかん、なんでやろ……」

ぶつぶつとつぶやいていると、となりで別のことをしていたお父さんが、はんちゃんの様子に気がついて言いました。

「はんちゃん、それは血の吸わせすぎや」

お父さんは笑います。

「はんちゃんも、いっぱいごはんを食べたら動きたくなくなるやろ？ 蚊のドローンも、お腹がパンパンでいまは何にもしたくないねん」

お母さんの

パチ農業





「お母さん、それ、なにしとん？ なんか植えるん？」

なあちゃんは、家のベランダでプランターをいじっているお母さんに聞きました。お母さんは答えます。

「そうや。いま流行ってる”プチ農業”っていうやつをやる思て」
「プチ農業？」

「小さい小さいちびサイズの野菜をプランターで育てるねん。家で農業体験ができるっていうて人気が出とって。種類もな、ちびピーマンに、ちびキュウリ、ちびニンジンとか、いろいろあるねん。お母さんが買ってきたんは、ちびトマト。その種を、いままたとこや」

なあちゃんは、おどろきながら聞きました。

「それって、どれくらい小さいん？」

「そやなあ、まあ、それは実ってからのお楽しみってとこやな。ほな、なあちゃんも一緒に育ててみる？」

「うん！」



その日から、なあちゃんはお母さんと一緒にチビトマトの世話を始めました。毎日水をやっていると、数日後には1ミリほどの小さな芽がプランターに生えてきました。

「お母さん、いっぱい芽が出とる！！」

なあちゃんは、ますますチビトマトに夢中になります。

芽はどんどん伸びていき、やがて2センチほどになったころには小さな葉っぱをしげらせました。そしてついに、2ミリくらいのチビトマトが枝の先にたわわに実ったのでした。

「ほんまに、めっちゃ小っちゃい……」

「さ、収穫するでっ！」

腕まくりをするお母さんと一緒になって、なあちゃんも虫メガネをのぞきこみます。そして、ピンセットでつまみながらチビトマトを収穫していきました。指先がふるえて大変でしたが、二人は2時間ほどかけて、ようやく全部を収穫することができました。



作業を終えたお母さんは言いました。

「はあ、目が疲れたわあ……ほな、さっそく食べてみよか」

「ねえ、そういえば、これってどうやって食べるん？」

「ふりかけみたいにして、サラダにかけて食べるねん」

と、そう言った直後のことでした。お母さんが急に顔をしかめたかと思うと、「はっくしょんっ！」と大きなクシャミをしたのです。「あっ」と思ったときには遅すぎました。せっかく収穫した手の上のチビトマトたちはプランターに飛び散って、土にまぎれてしまっていました。



「うそやん……」

二人はぼうぜんとなりましたが、それでもお母さんは、しばらくのあいだ土のうえを虫メガネで必死になって探していました。けれど、ピンセットで2、3個つまみあげたところで、すぐに音をあげました。

「ムリや……小さすぎて、よう探されへん」

そして、ちょっとヤケぎみに、こう言いました。

「やめやめ、やめや。こんなんやったら、落ちたトマトが芽え出すほうがよっぽど早いわ」

ゲンキ

ふんばいさ

分配器



「けいちゃん、ええところがあるねん。ちょっと行かへん？」

「ええところ？ なになに？」

「まあ、行ってみたら分かるから、行ってみよや」

けいちゃんがお母さんに連れられたのは、けいはんなプラザのすみっこでした。そこにはバスのような大きな車が止まっ
ていて、あたりは親子連れでにぎわっていました。

「あれ？ はんちゃん！ あ、なゃちゃんも！」

けいちゃんはお母さんと一緒にいる二人の姿を見つけました。
二人もけいちゃんに気がついて、近づいてきます。お母さんたちが
あいさつをし終わったあと、けいちゃんが口を開きました。



「なあ、ほんで、これ何なん？ そろそろ教えてえや」

すると、はんちゃんのお母さんが答えました。

「ほら、血をあげる献血ってあるやろ？ これは、ゲンキ分配器という装置を使う、献血ならぬ献気（けんき）っていうて。ありあまる子供たちの元気、つまりは“気”を吸い取って、大人たちが分けてもらうための新しい技術やねん。お母さんらは、たくわえられたみんなの気をもろて、元気いっぱいになってまたがんばるわけやね」

「ふうん……」

三人はピンと来ていない様子でしたが、なあちゃんのお母さんがパンと手をたたきました。

「ま、並んで並んで」



そうして三人は、車へとつづく親子の列に並びました。最初にけいちゃんの順番が回ってきて、ひとりで車の中へと入っていくと、白衣の人からバンドを腕にまかれました。次の瞬間、けいちゃんは身体からすうっと何かが抜けるような感覚にとらわれます。「終わりですよ」と外に出されると、つづいて出てきたはんちゃんとなあちゃんと合流しました。

けいちゃんのお母さんが三人に言いました。

「はい、これでおしまい。そしたらお母さんらは、これから
元気をもろてくるから、せっかくやし三人で遊んできいや」

そしてお母さんたちは、別の車へとつづく列のほうへさっさと
行ってしまったのでした。
けいちゃんが、ぼつりと言いました。

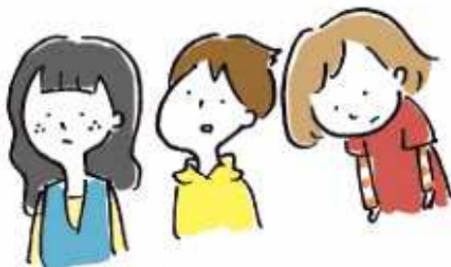
「なんや、今日は遊ぶ気がせえへんなあ……」

「ぼくも、そう思とった……」

「わたしも……」

「ほな、ぶらぶらしながら帰ろっかあ……」

なんだか気の抜けたようになった三人は、おしゃべりもせず
家に帰っていったのでした。



その翌日、三人は学校で顔を合わせると、前の日の話になりました。

「なあ、二人の家、あのあと何もなかった？ なんかヘンやなかった？」

けいちゃんが聞くと、はんちゃんが答えました。

「ヘンやった。ぼくん家は、なんでかおとんもおかんも野球見ながら、一球ごとに大げさに叫んでうるさかったわあ……」
つづいて、なあちゃんが言いました。

「わたしのところは、寝ようとしてるのに二人が順番にしゃべりかけてきて全然寝られへんかった……」

「やっぱりか。うちの家はトランプしよしよって、ずっと離してくれへんくって……」

三人はため息をつき、声をそろえてこぼします。

「ほんま、なんやよお分からんけど……親の相手するだけで、えらい疲れてしもたなあ」

